

支寒内

先田次雄

苫小牧市緑町

はじめに

昔の洞門で知られる支笏湖・支寒内地区に、幹の周囲長が全道一、全国でも第二位のドロノキがあるのをご存知だろうか。林床がコケに覆われたエゾマツやトドマツのみごとな天然林もある。

支笏湖といっても、千歳川の河口に位置する支笏湖温泉のように古くから人間の暮らしがあった地区もあれば、美笛のように金鉱山の閉山で廃れた地区もある。支笏湖を構成する各地区には、それぞれ多様な自然環境や歴史がある。観光スポット・昔の洞門以外に話題になることもほとんどない支寒内はどのようなところだったのだろうか。忘れられた支寒内の歴史をたどってみた（明治期以前は西暦、以降は元号を基本とした）。

地理・地形

支笏湖の南岸に位置する支寒内地区は、東側に風不死岳（一一〇三メートル）、南東側に樽前山（二〇四一メートル）、西側に多峰古峰山（六六一メートル）、南側を社台（白老）台地に囲まれ、樽前山から緩やかな斜面が湖まで下っている。この地形は、千歳市街地に近い近降下軽石を積もらせた一七三五年七月の樽前山大噴火の堆積物によって形成された。

地区名「ししゃもない」は、アイヌ語で「シシャモ・ナイ（和人・沢）」と呼ばれたことから名付けられたとされている。なぜ和人の沢なのかは判然とし



写真1 支寒内地区全景
右が樽前山、左が支笏湖で、支笏湖側の白く見える一帯が平成16年9月の台風18号による風倒木被害地

ないが、不完全なアイヌ語で「この沢に和人（シヤモ）が死んでいたので、シ（死）シヤモ（和人）ナイ（沢）」という言い伝えもあるという。

同地区には大きく西から「シシヤモナイ沢」、「苔の洞門の沢」、「カヌ路畑の沢」の三つの沢がある。

シシヤモナイ沢は樽前山の西側社台大地の稜線から枝沢を集め多峰古峰山沿いに国道276号近くまで水が流れている。一番東側の路畑の沢は、樽前山ではなく風不死岳北西面の沢で、沢口の湖岸にアキタブキが密生していたことから、そう呼ばれたとされている。

苔の洞門の沢については、おとみぎやせう長見義三が著書『ちとせ地名散歩』の中で、アイヌ語で「チセ（イ）オマピナイ（家の形をしている水の流れていない沢）」としながらも「ニセイ・オマ・ピナイ（兩岸絶壁のある涸れ沢）」が誤聞された可能性があると指摘している。

営林署の地図・森林位置図（林班図）には、この沢の上流の三角点が「カヌ唐沢」と表示されており、歴史研究家の地蔵慶護も著書『武四郎のタルムエ越え』の中で「これが苔の洞門と呼ばれている沢だと思う。昔は『唐沢』と呼ばれていた。春先の雪どけ水が軟石をえぐって回廊のような深い谷をつくったが、普段は水が無いので『から沢』と呼ばれていた。昭和十七年（小学生のころ）大人に混じってモラップの浜から樽前山に登り、下りはこの唐沢を通して湖岸に出たことがある」としている（ルビ引用者）。

このほか、昭和六（一九三二）年に井田清他編の登山案内書『北海道の山岳』の支笏湖・樽前山の項に「モラップからの登路」とともに「シシヤモナイからの登路」として「シシヤモナイ澤は風不死岳の西側の澤である。湖畔より舟で澤口に達し、木材搬出路を登る。途中から水のある澤に出て、それを遡ると涸澤になる。その涸澤を登り詰めると裸地に出る。それからは外輪山迄わけなく登れる。（中略）又この澤の東方、シルス涸澤の左岸に沿って森林を登って

も、裸地で前記の登路と合する」と紹介している。文中にある「シルス涸澤」の「シルス」の意味は不明だが、これが苔の洞門のある沢「唐沢」だろう。

この登路については詳細が分らなかったが、このほど室蘭市在住の道路史研究者・大島仁が古書店で入手した5万分の1地形図「樽前山」（昭和四十三年編集）に入れられた書き込みでほぼ明らかになっている。

書き込みによると、現在の林道南支笏3号人口付近から、現在よりも流路が東側にあったシシヤモナイ沢に沿って進み、樽前山西山頂から北東に伸びる尾根を超えて苔の洞門上部沿いの斜面に入っていた。シシヤモナイ沢の最上流部には道とは呼べなくなった作業道の痕跡はいくつかあるが、どれがそのルートなのかは分っていない。

ともあれ、すでに昭和初期にはシシヤモナイからの登山とともに、「からさわ」の呼び名は一般的になっていたようだ。



写真2 大正から昭和初期のシシヤモナイルートからの樽前山登山
（撮影：谷本亀 VC）

また、『北海道の山岳』ではシシャモナイ登路について「非常に眺めが好い」などの記述があるが、苔の洞門のコケについては一切触れられていない。前出の地蔵慶護の著書の唐沢に関する記述でも「足元の砂にアリ地獄がたくさんあったことを覚えているが、両側の壁のコケまでは気がつかなかった。それが今では苔の洞門として観光客を集めているのである」とある。当時、コケが注目されることなかったようだ。

支笏湖の開発

支笏湖に本格的な開発の手が入ったのは明治になってから。それ以前は自然と共に暮らすアイヌ民族の狩猟の場だった。

「支笏」はアイヌ語の「シ・コツ（大きい凹地または谷）」で、もともとは支笏湖をさすものではなく、支笏湖から流れでる千歳川の凹地をさす地名だった。ところが「シコツは死骨」に通じて縁起が悪いと、一八〇五（文化二年）にこの川の付近の湿地にツルが多く生息していたことから、鶴は千年にあやかって、めでたい「千歳」に改名されてしまった。支笏湖は「シコツ・トウ（沼、湖）」と呼ばれていた。

江戸時代の探検家・松浦武四郎が、一八五六年七月にウサクマイ（千歳）からトウヤ（支笏湖畔）に入ったことが、一八六二年に刊行された踏査記『夕張日誌』に記されている。『夕張日誌』の記述は、和人がシコツを訪れた明確な記録のはじまりとされている。

ところが、シコツの地名は、元禄時代（一六八八〜一七〇三年）以降の古文書や古地図に登場している。武四郎以前に木材資源を求めて多くの和人が来ていたようで、地蔵慶護が道立文書館で見つけた古文書を著書『身近な北海道歴史紀行』などで紹介している。

これは、一七〇〇年代に「石狩山経営」として漁川流域などの伐採で知られ

る飛騨国（現・岐阜県北部）の木材商・飛騨屋久兵衛関連の古文書で、飛騨屋は主に白色で光沢があり木理が真つ直ぐ、弾力もあり軽くて強いことから、江戸や大坂でエゾヒノキとしてかなりの需要があったエゾマツの伐採を行っていた。

古文書は飛騨国湯嶋郷（現・下呂市）出身の善左エ門が支笏湖で怪獣に出会った話で、蝦夷シコツ沼で一七六三年六月に木材の搬出作業中、「水中よりヌツと頭を上げたものがあつた。馬のように首が長く一丈（三以忝）ばかり、栗毛のような毛が生え油気があつてぬるぬるしている。頭の頂は畳一枚より広く両耳大きく時々これを動かす」と紹介している。余談になるが、地蔵慶護はこの怪獣を、英国ネス湖の怪獣「ネッシー」になぞえて「シッシー」と名付けている。

近代に入ってから、明治二十二（一八八九）年に支笏湖や樽前山周辺の官有林野が皇室の経済的基盤をかためるための御料林に編入され、二十九年には丸山地区にマッチ工場が設置されている。さらに四十一（一九〇八）年には、苫小牧に進出した王子製紙の発電所建設工事、製紙原木搬出のための王子製紙苫小牧工場専用鉄道（王子軽便鉄道）が完成。その前年から、王子製紙による樽前山麓での伐採が始まった。これが支笏湖周辺まで広がったのは大正二（一九一三）年になってからで、このころから森林の面積皆伐が取り入れられている。

支笏湖周辺の開発は明治後期から大正にかけて急速に拡大していく。支笏内地区でも大正時代に伐採事業用の栈橋が設置されるなどしているが、まだ江戸期の姿を残していた。

国道276号

支笏湖畔（現・支笏湖温泉）と千歳、苫小牧を結ぶ交通は、札幌鉄道局が昭

和七（一九三三）年に出した『北海道』という観光案内書に「支笏湖への道は二通りある」として苦小牧からは山線への便乗、千歳については千歳駅から王子製紙第四発電所まで自動車、そこから山線への便乗と記している。

千歳から支笏湖までは明治二十二年に支笏湖や樽前山周辺が御料林に編入当時、荷馬車が通行できる道はある程度整備されていた。二十七年には道東の阿寒湖から支笏湖にヒメマス卵の移植が行われている。

自動車が通れる道として整備されたのは、千歳村道として昭和八年。これが拓殖費支弁地方費道になったのは十三年で、十五年の札幌鉄道局『北海道案内』では、苦小牧からは山線で同じだが、千歳からは「千歳駅から乗合自動車で約一時間」と記されている。この道路が主要道道支笏湖公園線として認可されたのが二十九（一九五四）年。現在の舗装工事に取り掛かったのは二十四年に支笏湖が国立公園になって十年目の三十四年からで、完成まで七年を費やしている。

苦小牧と支笏湖を結ぶ道路は、明治二十二年の支笏湖や樽前山周辺御料林編入や二十九年の丸山地区でのマッチ工場設置などから、明治中期には千歳側同様に荷馬車が通行できる道は造られていたようだ。

本格的な整備は、明治四十年、王子製紙の千歳川水力発電所建設に合わせて工事資材運搬のための林道整備からになる。完成した林道を使って当初は馬車による運搬だったが、物資の増加で馬車軌道が敷設され、四十一年八月にはさらに輸送力を増すため蒸気機関車が導入された。これが王子製紙軽便鉄道通称「山線」。

国立公園指定による観光客の増加などを受けて自動車道（支笏湖産業道路Ⅱ 道道苦小牧支笏湖線）が計画されたのは戦後の昭和二十三（一九四八）年。米軍貸与の機械力もあってわずか二〇日で完成し、二十五年八月二十四日の完工翌日から苦小牧市営バスの運行が始まっている。このため山線は一年後の

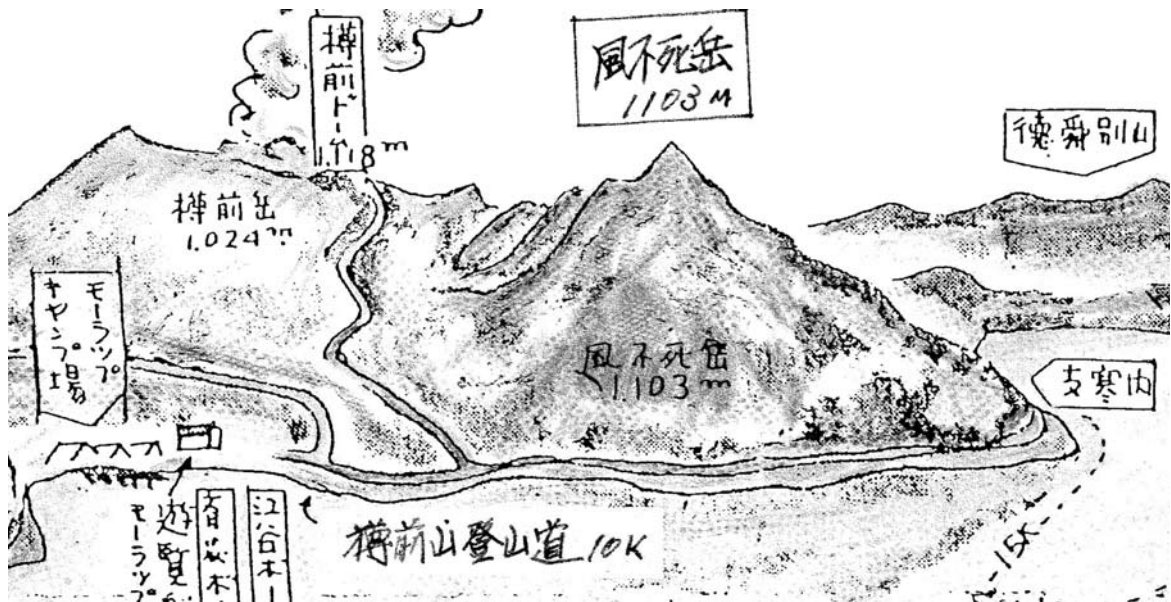


図1 『支笏湖観光案内図』「涼風は招くよ観光支笏へ～さあ行こう湖水に！登山に！」（苦小牧観光協会・千歳観光協会編）湖岸沿いに支笏湖畔～モラップ～支笏内の道路と樽前山登山道が確認できる（昭和27年頃千歳新聞社発行）

二十六年五月をもって廃止されている（資料回収で八月まで運転）。

千歳と支笏湖、苫小牧と支笏湖を結ぶ道路は整備されたものの、モラップ（大滝（現・伊達市大滝区）間については遅れていた。大滝から美笛峠（標高約六〇〇㍍）までは昭和二十七年までに開削されたが、さらに急峻な美笛峠を越えて美笛に至る町村道大滝支笏湖線が着工されたのは二十九年になってからで、開通は三十三年ごろとされている。

モラップ（美笛間）については、大正十四（一九二五）年の北海道庁『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』に「湖畔の道路は中略一間半（約二・七㍍）、千歳川口より左に廻りて『シシャモナイ』澤に至る約三里余」と記されている。また、昭和二十七年ごろ発行された千歳新聞社『支笏湖観光案内図』の絵図にモラップから湖畔沿いに風不死岳をシシャモナイ方面へ向かう道路が描かれている。当時、荷馬車の通れるほどの道があったという伝聞はあるが詳細は分っていない。一方、昭和三十年測量の国土地理院2万5千分の1地形図には美笛（シシャモナイ）間の小径が載っているが、シシャモナイ（モラップ）間の記載はない。

自動車道として記録に残るのは、昭和三十五年ごろに完成した札幌管林局の林道「湖畔道路」で、これ以前の千歳鉱山の鉱石や支笏内の木材の輸送は湖上輸送だった。

この湖畔道路が主要道洞爺湖支笏湖線となったのは昭和四十（一九六五）年。国道276号に昇格したのは四十五年四月だった。

「苔の洞門」の名称

「湖畔道路」の開通から道道昇格、国道昇格で洞爺湖と支笏湖がより近づき、千歳市では支笏湖を経由する市内の観光客増加への期待を大きく膨らませた。その新しい観光資源として注目されたのが美笛地区の「美笛の滝」と支笏



写真3 シシャモナイ唐沢
写真2と同時期に撮影されたものと考えられる
（撮影：谷本亀 VC）

内地区の唐沢の「コケ」だった。

千歳市などが発行した観光パンフレットをたどっていくと、昭和三十五（一九六〇）年までは「苔の洞門」そのものに触れておらず、三十六年の『ちとせと支笏湖』に初めて「シシャモナイ唐沢」として掲載され、翌年にも使われている。ところが三十八年以降四十一年まで記載がなく、四十二年六月に同沢をコースの一部として開催された高校生の全道登山大会のしおりでも「シシャモナイの沢」とのみ紹介されている。

観光パンフレットで「苔の洞門」の名称が初めて使われたのは昭和四十三年になってからで、観光パンフレット『ちとせと支笏湖』に「支笏内涵沢にある苔の洞門」として紹介されている。同年に発行された札幌鉄道管理局の『森と湖と火山の支笏・洞爺国立公園』には載っていない。

昭和四十五年になって札幌局、北海道観光連盟などが発行した『道央観光』に載せられ、やっとこのころになって全道的な観光地として認知されたよう

だ。以降「こけの洞門」「コケの洞門」「苔の洞門」と表記上の違いはあるものの、この名称は市内外で定着している。

この経緯から昭和三十年代後半に、観光資源として活用するために「苔の洞門」と名付けられたのか、あるいは関係者の間でそう呼ばれていた名称を採用したのだろうか。

洞爺丸台風と森林

支寒内の地形や自然は樽前山の火山活動が密接に関係している。特に大きな影響を与えたのは一七三九年の樽前山大噴火だった。

樽前山噴火の歴史を降下軽石の地層で見ると、一番下に四万年前の支笏火砕流。その上が九千年前の樽前d (Ta・d) 降下軽石、次に二千五百年前の樽前c (Ta・c) 降下軽石、一六六七年の樽前b (Ta・b) 降下軽石、一七三九年の樽前a (Ta・a) 降下軽石と続いている。樽前山は九千年前に活動が始まってから大規模な噴火を繰り返す三回の活動期があった。

樽前cからbまで二千年あまりの期間があり、その後は五〇〇七〇年ごとに噴火が繰返され、一六六七年と一七三九年の噴火では軽石を主とする降下物を一万層以上上空の成層圏にまで吹き上げている。その後、文化年間(一八〇四～一八一七年)、慶応三(一八六七)年～明治七(一八七三)年、明治四十二(一九〇九)年と大きな噴火が続き、現在の溶岩円頂丘(ドーム)は四十二年の噴火で誕生している。

支寒内の森や谷は一七三九年の火砕流で埋め尽くされ、それ以前の森は壊滅している。現在の森は一七三九年以降の天然更新でよみがえったものだ。開発の手が入り始めた明治になって御料林に指定され、戦後は国立公園になったことで、大規模な伐採を免れてきた支寒内の森はトドマツやエゾマツなどの針葉樹を主にミズナラやハリギリなどの広葉樹が生い茂る原始林といえる景観を残



写真4 昭和29年9月の洞爺丸台風の被害を受けた支寒内地区 (VC)
右下に見える施設は、風倒木処理のため建設された苫小牧営林署の事務所と栈橋

していた。

この森に、一七三九年以来最大ともいえる壊滅的な被害を与えたのが昭和二十九（一九五四）年九月の洞爺丸台風（台風15号）だった。猛烈な暴風を伴った台風は九州、中国地方から日本海に抜けた後、勢力を増しながら北上。函館港沖で青函連絡船洞爺丸を座礁転覆させるなど北海道を中心に多数の犠牲者、大きな被害を出している。

森林被害も甚大で、支笏湖周辺では一三〇万立方メートルに及び、苫小牧営林署管内国有林の三分の一が失われた。支寒内地区でも見事な天然林が一夜にして壊滅した。同地区を所管する苫小牧営林署では機械化造材を取り入れ、当時まだ少なかったブルドーザーやチェーンソーなど機械力を導入して風倒木処理に当たった。この風倒木処理は昭和三十四年まで続いた。

苫小牧営林署に長く勤務した佐々木昌治ささきまさはるの著書『樽前山麓の森林』によると、苔の洞門のすぐ西側の支笏湖に面した緩斜地の森林は「エゾマツ、トドマツの針葉樹林だったが、昭和二十八年七月の低気圧（最大瞬間風速二九・九メートル）によってほとんどが倒れ、さらに翌年九月の洞爺丸台風が重なって全滅した。現在見られる森林は、前生樹の下層で生育していたものが上木である前生樹が倒れ、陽光を十分に浴びて成長し優占したものである。林相はトドマツ七〇割、他にエゾマツ、アカエゾマツ、ダケカンバ、ケヤマハンノキなどによって構成され、一畝あたりの成立本数は四〜七万本と非常に多い」と記している。この一帯は、その後「支寒内地区天然更新地」として天然林除伐の試験地となっていたが、洞爺丸台風とほぼ同じコースをたどった平成十六年九月の台風18号で再び大きな被害を受けている。

被害を免れた天然林

二つの台風で壊滅的な被害が出たが、苔の洞門沿いや中、上流部一帯の天然



写真5 林床がコケに覆われた支寒内地区のエゾマツ原生林

林は奇跡的に被害を免れていた。下流部はトドマツ、中・上流部はエゾマツを主体とする針広混交複層林で、人の手が入る前の樽前山周辺の森をほうふつさせる。特に林床がコケに覆われた中流部は、支笏湖周辺ではここだけとなっている。

この天然林について、佐々木昌治は「この林の内容を事業図（昭和四十七年調査）から読みとると、エゾマツが八〇％を占める針葉樹林で、樹齢は約一四〇年となっている。（中略）これらエゾマツの更新時期は樽前山の噴火（二七三九年）から実に九十三年後となる」としている。今年（平成二十四年）一八〇歳を迎えたことになる。

ドロノキ

さて、冒頭のドロノキの巨樹。巨樹は馴染みの薄い言葉だが、平成十年に環



写真6 幹の周囲長が全国第2位のドロノキ
左側の人物と比べるとその大きさがわかる
(平成23年11月撮影)

境庁が行った「自然環境保全基礎調査」の中で「巨樹・巨木林調査」として登場。地上から約一・三メートルの位置での幹の周囲長が三メートル以上の樹木を「巨樹」と規定している。そして、それらが並木や樹林などの形態を成しているものを「巨木林」としている。

筆者が支管内地区で平成二十二（二〇一〇）年と二十三年に見つけた幹の周囲長四メートル以上のドロノキは九本。そのうち最大は六二〇センチ（平成二十三年十一月計測）で、環境省のデータベースでは、青森県十和田市の小幌内川上流で見つかった六九七センチ（平成十年同）に次ぐ大きさだった。ちなみに支管内地区での二番目は五六三センチ（平成二十二年十一月同）で、この二本を含め三本が、道内で最大とされている上川管内下川町国有林の四八一センチ（昭和六十三年同）を超えていた。

明治から大正に掛けてマッチの軸木として大いに活用され造林も行われたドロノキだったが、材質が軟らかいこともあって現在ではほとんど需要がない。山奥にある巨樹は伐採しても経費倒れになるため放置されたので、ここまで大きく育つことができたのだろう。

おわりに

今回の原稿を書き終え二つの大きな宿題が残った。一つは「苔の洞門」の名称の由来。もう一つは、文中で触れなかったが昭和五十年当時、環境庁の自然公園指導員を務めていた千歳市の田沢昌樹たざわまさきのこと。田沢は北海道新聞（昭和五十二年十月七日付）で苔の洞門の研究者と紹介され、調査したコケの分布壁面は「ざつと五二・八平方キ」などの調査結果が載せられている。今回、この研究成果を探したが見つけることができなかった。

（敬称略）

引用・参考文献

- 長見義三『ちとせ地名散歩』北海道新聞社 昭和五十年
佐々木昌治『樽前山麓の森林』一耕社 平成十七年
井田清他編『北海道の山岳』晴林堂 昭和六年
地蔵慶護『武四郎のタルマエ越え』みやま書房 平成三年／『北海道身近な歴史紀行』
北海道新聞社 平成十一年
丸駒温泉旅館『支笏湖丸駒温泉旅館80年 原始の森と湖に…』平成七年
自然公園財団『パークガイド 支笏洞爺国立公園 支笏湖』平成二十年
千歳市『千歳市史』 昭和四十四年／『増補千歳市史』 昭和五十八年／『要覧ちとせ』 各年
苫小牧市『苫小牧市史』上巻 昭和五十年／『苫小牧市史』下巻 昭和五十一年
北海道開発局『一般国道276号 支笏湖国道工事誌』平成三年
『北海道新聞』／『千歳民報』／『苫小牧民報』／支笏湖関連各種パンフレット

協力

- 守屋憲治（千歳市）
大島仁（室蘭市）
佐々木昌治（苫小牧）
若松幹男（札幌市）
写真提供協力・支笏湖ビジターセンター（VCで表示）
自然公園財団支笏湖支部（VC管理運営）

『新千歳市史 通史編上巻』好評発売中

各分野の研究者32名と一機関の執筆による

新たな視点による「新たな千歳市史」

千歳の自然や気候、先史時代から終戦までの歴史を詳述しています。

A4判全1, 026ページ、箱ケース入り、一冊3, 500円

市役所総務課で販売しているほか、郵送でも購入できます。

郵送の場合、送付先（住所、氏名、電話番号）を明記し、本体代金と郵送料（道内800円、東北1, 000円、そのほか1, 150円）を現金又は定額小為替でお送りください。

申込先は、

〒066-8686 千歳市東雲町2丁目34番地

千歳市総務部総務課

